

高温に伴う農作物等の管理対策

令和8年5月19日

新潟県農林水産部

新潟地方気象台が5月18日に発表した高温に関する早期天候情報（北陸地方）によると、5月24日頃からかなりの高温が予想されています（5日間平均気温差+2.2℃）。

また、5月14日発表の1か月予報では、暖かい空気に覆われやすいため向こう1か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなることが見込まれています。

については、今後の気象情報に留意し、以下のとおり、農作物等の管理を行うとともに農作業時には熱中症に注意しましょう。

1 水稲

(1) 高温により、水田内雑草の発芽や生育が早まるため、雑草の発生状況をよく観察し、除草剤の適期を逃さないように散布する。

また、高温時に薬害が発生しやすい除草剤があるので、除草剤のラベルの注意事項をよく確認する。

(2) 地温の上昇により、田のワキや藻の発生が多くなるので、夜干し等で一時的に落水し、根腐れや生育停滞を防止する。

(3) 高温で茎数が急激に増加することが懸念されるため、田植後25日を過ぎたら茎数を確認し、目標穂数の7～8割になったら、中干しを行う。

(4) 高温時に速やかなかん水が行えるよう、溝切りを行う。タテ溝とヨコ溝の接続、溝と水口や水尻を接続する。

(5) 過度な中干しは根を傷めるので、田面に大きなヒビが入る前に中干しを終了し、飽水管理に移行する。

2 麦

(1) 高温や土壌が乾燥した後に土壌が過湿になると成熟期前に枯れるおそれがあるため、速やかに排水できるよう排水溝を点検し、湿害を避ける。

(2) 高温かつ降雨による赤かび病や穂発芽による品質低下を防止するため、穀粒水分が35%以下になったら早めに収穫する。

3 園芸全般

(1) 高温で生育が早まる可能性があるため、各種管理作業を適期に行えるよう早めに準備する。

(2) 気温の上昇に伴い、施設ではコナジラミ類、アザミウマ類、ハダニ類、露地ではアブラムシ類などの害虫が増加するおそれがあるので、病虫害発生予察情報に留意し、早期発見に努め、発生状況に応じて適期に防除する。

(3) 高温時の薬剤散布は、薬害が発生するおそれがあるため、朝・夕の涼しい時間帯に行う。

(4) 施設栽培は、遮光・遮熱資材の被覆・展張や、換気、循環扇による送風等で温度・湿度を適切に管理する。ただし、温度・湿度が急変しないように換気量

は徐々に増やす。

- (5) 高温時は吸水量が増加するため、土壌や用土が乾燥しすぎないように、土壌水分に注意し、日中にしおれない程度にかん水する。

4 野菜

(1) 施設野菜

- ア 苗がしおれないよう、25℃を目安に換気してハウス内温度を下げ、遮光やこまめなかん水を行う。
- イ トマトは、着果負担による葉先枯れなどの症状がみられると、枯死部位から病害が発生しやすくなるため、枯死部や罹病部を除去した後、薬剤防除を行う。
- ウ いちごは、高温条件で品質が低下しやすいため、気温が低い早朝収穫に努めるとともに、収穫後の果実を丁寧に取扱う。
- エ ハウスすいかは、日中 30℃～35℃を目安に換気量を調整するとともに、急激な換気による葉焼け及び脱水に注意する。
- また、晴れて気温が高くなることが予想される場合は、日中に葉がしおれないように、朝、かん水する。

(2) 露地野菜

- ア 定植後、活着するまでの4～5日間は適宜かん水する。
- なお、かん水設備がない場合は、定植時に植え穴にかん水する。
- イ えだまめの育苗では、は種直後の高温で発芽不良となるため、日中は遮光資材等を使用して地温度上昇を抑える。
- ウ すいかの密閉トンネル作型やトンネル早熟作型、メロンのトンネル作型では、高温による葉焼け等を防ぐため、通常より換気量を多くする。
- ただし、すいかの密閉トンネル作型では、高温時に急激に多くの換気穴を開けると湿度の低下により葉焼けを起こすため、換気穴は早朝に開ける。その際、換気穴の数は徐々に増やす。
- また、晴れて気温が高くなることが予想される場合は、日中に葉がしおれないように、朝、かん水する。
- エ ねぎのチェーンポット育苗の定植では、定植ほ場の土壌水分が少ない場合は、土壌の乾燥を抑えるため、定植当日に定植溝を作る。
- 高温時に土寄せしない。
- オ アスパラガスは、土壌が乾燥すると萌芽が抑制されたり、品質が低下したりするため、必要によりうね間かん水等を行う。
- カ さといもの定植後マルチ被覆栽培は、出芽した芽を焼かないようにほ場を見回り、芽を確認したら速やかにマルチ部分を切り開く。
- キ そらまめは、土壌が乾燥した場合は、適宜うね間かん水等を行う。
- ク 収穫後のたまねぎは、乾燥中の高温多湿による腐敗を防止するため通風等により温度・湿度を下げる。

5 果樹

- (1) ぶどう、日本なし、いちじくなどの施設栽培は、ハウス内の高温による生育障害を受けやすいので、換気により温度・湿度を適切に管理する。
- (2) 高温により生育が早まる可能性があるため、袋掛け、仕上げ摘果、新梢管理などの管理作業は、生育進捗を把握しながら適期に行う。
- (3) 高温多湿により病害の発生が懸念されるため、病虫害発生予察情報等に留意し、生育ステージに応じた適切な病虫害防除に努める。
- (4) 定植して1年未満の若木は、根圏が狭く乾燥に弱いため、降雨がない状態が続く場合は適宜かん水する。
- (5) 土壌水分を保持するため、草生法の園では、草刈りを行い果樹と草の競合を避ける。清耕栽培では、樹冠下部に敷きわらやマルチをする。

6 花き

(1) 球根類

ア チューリップ等の球根養成では、最も水分を必要とする球根肥大期に土壌が極端に乾燥しないよう、適切にかん水する。特に、砂丘畑など乾燥しやすいほ場では、スプリンクラーで定期的にかん水する。

生育後半は徐々に水分を抑えて枯葉が均一になるようにする。

イ チューリップ等球根類の掘取り後の初期乾燥及び球根調整後の本乾燥では、高温多湿による球根腐敗病等を防止するため、通風等により乾燥庫内の温湿度をできるだけ下げる。

ウ ユリの球根養成ほ場では、高温多湿条件で葉枯病等の病害が発生しやすいため、ほ場をよく観察し、適切な防除に努める。

(2) 露地切り花類

ア 高温多湿条件で灰色かび病等の病害が発生しやすいため、ほ場をよく観察し、適切な防除に努める。

イ 抑制ユリ切り花栽培では、植付け前に芽伸ばし・順化处理を十分に行うとともに、植付け後は地温・気温低下を目的に敷わらや遮光管理を行う。

(3) 施設切り花・鉢花類

ア 土壌や用土が乾燥しすぎないように土壌水分に注意し、適切にかん水する。

イ 高温多湿条件で灰色かび病等の病害が発生しやすいため、ほ場をよく観察し、適切な防除に努める。

ウ 高温多湿・日照不足による軟弱徒長を防ぐため、天候に応じた適切な遮光管理やかん水管理に努める。

エ 曇天・雨天後の高温や強日射により葉焼け等の生理障害が生じやすいので、遮光資材の被覆や換気、循環扇による送風等により温度・湿度を適切に管理する。

オ オリエンタル系ユリ切り花では、高温期の採花において出荷前の予冷温度が低すぎると花しき障害が発生しやすいので、予冷温度は10℃程度で行う。

7 畜産

- (1) 急な気温上昇に伴う家畜疾病を予防するため、換気・送風・寒冷紗・屋根への塗装等の暑熱対策は早めに行う。特に、換気扇、送風機は掃除、注油、ベルトの張りや電気系統などの点検を行い、稼動を確認しておく。
- (2) 畜舎は風通しを良くするため、野生生物や塵埃による病原体の侵入防止対策を行った上で、開口部は可能な限り開放するとともに障害物は除去する。
- (3) 搾乳牛は畜舎内の温度が 20℃を超えたら暑熱対策を行い、家畜の体感温度を低下させる。
- (4) 家畜の様子をよく観察し、餌槽や飲水設備をこまめに清掃・点検する。また、食欲低下を防ぐため、良質な飼料と常に新鮮な飲水を与える。
- (5) 高温時は、家畜のミネラルやビタミンの要求量が増え、また、重曹はルーメン緩衝剤として有効なため、これらの慣らし給与を始める。ただし、乾乳牛への重曹の給与は避ける（低カルシウム血症や乳房浮腫のリスクが高まるため）。

8 きのこと

- (1) ハウス内の高温による生育障害を防ぐため、空調設備のない施設は、換気等により適切な温度に管理する。換気をする場合は、害菌・害虫の侵入防止対策を行う。
- (2) 害菌の早期発見に努め、汚染された菌床は速やかに撤去する。
- (3) 高温下では、きのこの品質低下が著しいので、適期に収穫する。
- (4) 収穫したきのこは、速やかに保冷库等で保管する。
- (5) 露地栽培については、通風確保や散水などによる温度・湿度管理に努める。
- (6) 仮伏せ中のほだ木をシート等で被覆している場合は、通風、日除け、散水などにより温度を管理する。
- (7) 生産現場の巡回回数を増やし、異変の早期発見に努める。

農作業中の熱中症を予防しましょう!!

暑さを避ける

高温時の作業は極力避け、日陰や風通しのよい場所で作業



こまめな休憩と水分補給

喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給



単独作業は避ける

複数名で作業を行う、時間を決めて連絡をとり合う



熱中症対策アイテムの活用

帽子や吸湿速乾性の衣服の着用、空調服や送風機の活用



そのほか、日々の体調管理など熱中症に負けない体づくりをしておきましょう!

農林水産省「熱中症対策パンフレット」より